
エゴイスティック・シンドローム

ジャン・レモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エゴイステイック・シンドローム

【Nコード】

N8892J

【作者名】

ジャン・レモン

【あらすじ】

突然のクビ宣告。

残りの財産は金にもならなそうな家具と五千円札、そして6キロ程度の米のみとなった元公安職員、シスカリ 静狩 ハシメ 一士。

元上司の口利きで再就職した先の仕事は現実化する噂、都市伝説を闇から闇へと葬る特務機関。

局長、ツキタテ 月館 シヤクナ 石南の指示のもと、一士はヒトという現象が引き起こ

す、現実と幻想の戦争に巻き込まれる。

“ケリを着けたはずだった、お前が俺の前に現れなければ…”

茫漠の彼方へと封印した過去の過ち、自らの異能をもって一土の
“今”が動き出す。

咎人の仕事（前書き）

さてさて、はじめまして、こんにちは。

ジャン・レモンと申します。

ふざけた名前だと思った人、読みなさい。

スベってる、イタいな、こいつと思った人、名前程スベったりイタ
い作品ではないようにするので読んでみて下さい。

その他の人、空いた時間の暇つぶし程度に目を通してくれただけで
もありがとうございます。

本作は、以前、私があるサイトで公開していた作品のリメイクで、
さらに掘り下げてみようと思い、書き綴ったものです。

とはいえ、リメイク前の作品をご存知無い方がほとんどだと思いま
すが、これを期に、変なペンネームのネット作家がいるな、と思っ
て下さったらありがたいです。

では、本編をどうぞお楽しみください。

ジャン・レモン

咎人の仕事

さて、これから、どうやったら生きていけるんだ？

さして広いとも言いがたい七畳一間のアパートで、一人の男が自分の財布と一袋の米袋を並べ朝早くから眉間に皺を寄せていた。

「まいった。これじゃあ一週間ともたねえ……」

米袋の中にあるべき米は5分の1程度しか残っておらず、財布の中身は樋口一葉が印刷された日本銀行券が一枚に小銭がいくらかあるばかり。

男は、ため息をつきながら横にあるテーブルに置いたままの紙に目を向ける。

紙面には“免職通知”と無愛想な明朝体で文字が印刷されているだけだ。

“3月20日をもって貴君、シズカリ 静狩 ハジメ 一士を公安委員会零課所属の任を解く。民間人に戻る事を是とし、貴君のこれからの活躍を期待申し上げます”

直属の上司である花井 源太郎から手渡された解雇通知。

公安の、しかもちよつと特殊な分野を担当する零課の課員に就職したのは3年程前。期待に胸膨らませ、頑張つて来たつもりだったが、上司から不要の烙印を押されてしまったのか、と落ち込んだのは3秒ほど。次の瞬間には花井課長の首を絞め、「何故自分がクビなのだ」と詰め寄ったが、「上の指示だからしょうがない。荷物をまとめて早く出ていけ」と言われ、首筋に同僚の当て身をくらい、昏倒。

気がついたら職場の駐車場の隅っこに寝かされていた。

「三日たつても何の連絡もねえってことはマジでクビにされた、ってことか？」

首を捻り考えてみたが、何せ新卒で零課に配属されたのだ。

他の一般的な公官庁や企業ではこのようなことが普通では有り得ない事であるとは露知らず、まあ、そんなものかと考えたが、実質、生きていく為に必要な食料が無い事を思い出す。

自然と、免職通知書の裏にある一枚の紙を前に出し、しげしげと読んでみる。

文面には花井の紹介状であることを示す内容と、簡単な地図が載っているだけだ。“今後の就職活動や見聞を広めるにしても好都合な場所がある。そこに人材登録していれば君にピッタリの仕事を回してくれるはずだ。”

「……………」
「どーゆうことだ？」

つまり、えーっと、人材派遣企業を紹介するってことか？

そこまで考え、一土はもう一度地図を見る。

場所は都内。問題はその地図に赤く丸を押された建物がある場所。五角形の石垣と、同じ形で一回り大きな堀でかこまれた、

「……………皇居？」

花井の紹介するという人材派遣会社とは皇居の中にあるということか？ということは国営？

そんな人材派遣会社聞いたことない。

ともあれ、だ。

「実際金がねえんじや死ぬしかねえ。それがいやなら稼いでこい、ってか」

自分に言い聞かせるように一土はスーツに着替え、出掛ける支度を整える。

だが実際、本人には全く聞かされていないことだったが、公安零課のクビ宣告から皇居の人材派遣会社へ一士が人材登録する、という流れは、正確に表現するならば“出向”。そして、彼がこれから行く人材派遣会社（仮）は、民間企業ではなく、正真正銘、言い訳の余地のないくらいの政府機関。業務内容は、ただ一つ。

曰く、“超常現象の対策及び処理作業”
つまりは、オカルト現象に対する特別機関である。

咎人の仕事 - 2 -

皇居の門をくぐり、近衛兵に花井課長の紹介状を見せたところ、別室に案内された。

「ところで、この会社ってなんで皇居の中にあるんです？」

同席、とゆうより見張る為と同じ部屋にいる近衛兵に聞いたが、目を伏せ、無言を返された。

「……………」

「……………」

「気まずい。」

10分程そのまま氷点下の空気が続き、静かなノックの後、これまで静かにドアが開き黒髪の……………」

「なんで女子高生が？」

思わず口に出してしまったが、彼女や近衛兵は気にするそぶりもツッコミもしなかった。

……………おかしい、何かがおかしい。

本能と理性が同時にサイレンを鳴らしたような錯覚。空いてるドアから何食わぬ顔で出ていきたい気分。

と、その時、女子高生が差し出した書類に近衛兵がサインし終わって、俺に向き直った。

「出て。これから局長に面会しに行くわ」

どうでもよさ気な抑揚の無い口調でスタンドアップを要求してくる女子高生に、思わず助けを求めるように近衛兵に顔を向けるが、すっかりスルー。

もういいや、とりあえずここは法治国家、日本だ。

皇居の薄暗い部屋に女子高生が入って来たとしても危険は無いだろう？

近衛兵も驚くそぶりすら見せないなら、ここでは日常的にこの手のやり取りをしているのだろう。

「わかった。でも局長？まるで政府機関みたいな呼び方だね」

「まるで、じゃなくて真正正銘の政府機関。早くして」

俺、嫌われてるのかな？

一抹、いや、かなりの不安を抱きながら長く、そしてコンクリート剥き出しの壁に囲まれた廊下を歩きながら、とりあえず無言でいるのも気まずいので会話を振ってみた。

「えーっと、質問が二三あるんだけど、いいかな？」「構わない、もしかしたら、あなた物凄い勘違いしてるかもしれないし」

カツカツカツ。

「えーっと、まずは、だ。ここは皇居の一角で、俺が紹介を受けた企業がここにある、ってことで間違いない？」

「訂正するのは二カ所、まず、あなたが紹介されたのは企業ではなく政府の特務機関。二つ目、ここは皇居の一角ではなく皇居が本部の一角でカムフラージュとして置かれているだけ」

「おいおいおい、今さりげに凄いこと言わなかったか、このお嬢さん。」

「そう、訂正部分において、一般人ならツッコまざるを得ない単語が出て来ている。」

「と、特務機関？なにそれ？少年漫画やラノベに出て来る秘密組織じみたやつ、とか？」

「そうね、アレに近い業務を専門としてるわ」

「とゆうことは、だ。」

「超能力者だったりスパイだったり、なんか気合いで世界を救ったりする連中がいる？」

「いや、待て待て俺。」

「仮にそんな連中がひしめいている機関があつたとしてだ、どうして何のスキルも持っていない俺が？」

「オカルト対策専門のマユツバ部署たる零課で勤務していたからか？ だったらもつと適任がいるだろうに。」

「私はあなたがここに出向してきた理由を詳しくは聞いてない」

「重厚な開閉式自動ドアが音も無く開き、ある程度の広さを持つ箱、

エレベーターに乗る。

「でも、ここに来た、とゆうことは資格がある、とゆうこと」

「いや、待ってくれ。出向？俺クビにされたんだけど？」

「それもカムフラージュ。公安委員会特務零課、通称霊枢課は、私たち特務機関、幻想侵食対策委員会の要請に従いあなたを寄越してきた」

「幻想侵食……？」

「詳しくは局長に聞いて。私はあなたを近衛兵の留置所から本部に連れてこいと言われただけ」そこまで言い終わると無言となった。

階層が書かれていないエレベーターが止まり、入った時と同じく無音で開閉したドアは上の無機質な廊下とはえらく違う光景を映し出した。

左右はガラス貼りであり、その向こうは白衣を着た研究員達が何かの装置を操作したり巨大な試験管を揺らしている装置の周りに集まり、しきりに何らかのデータを書き記している。

「あれらは私達の同僚。研究開発部」

「…結構デカイ組織なんだな」

「そうでもない。研究開発部は30人前後、そのほかに実働部、経理、総務、統括を合わせても100人に満たない」

こんなこと何でも無いとゆづように見向きもせず歩を進める。

「ところで君の名前は？」

「名前？尾賀^{オガ} 真琴^{マコト}。委員会の実働部に所属している」

そこで彼女、尾賀 真琴ちゃんは歩くのをやめ、左側の真つ白なドアの前にピタリと止まった。

横にあるプレートには達筆な字で“局長室”と書かれている。

二度のノックの後、彼女は口を開き、

「失礼します。局長、例の新人を連れてきました」

「空いてるよ、入ってきなよ」

朗らかな女の子の声。

……明らかに場違いだ。

「失礼します」

と、そこでドアを開き向こう側に広がる部屋に入っていくため一歩を踏んだ。

ドアという枠を越えた先に広がっていたのは、到底室内とは思えない光景があった。

それは、

「……ぬいぐるみ地獄か、ここは？」

そう。

地下にあるはずなのにさんと降り注ぐ陽光。

その光りに照らし出されたのは、かわいらしい虎や熊やコアラといった動物の、色とりどりのぬいぐるみたち。

よくよく見てみれば室内に植えられた木々もフェルト地のぬいぐるみ。

「やあ、待つてたよ、君が静狩 一土君だね。はじめまして、ボクは月館ツキダテ 石南シヤクナ！石に南シヤクナって書いて石南！よろしくね？」

と、ぬいぐるみの谷間に設えられた高級そうなテーブルにちよこんと座っている、黒を基調としたレーズ地の服を着た見た目小学生高学年くらいの女の子が声を掛けてきた。洋風画の美しさと子供の無防備なあどけなさが同居するベストミスマッチさに目を奪われてしまふ。

「うん？どうしたのかな？固まっちゃって」

不思議そうに小首を傾げ、俺を覗き込む。

そこでようやく自分がフリーズしていたことを自覚し、慌てて頭を

動かした。

「あ、いや、ちょっと待ってくれ。いろいろとツッコミどころが多過ぎて混乱していた」

「失礼よ」

「ハハハ、言いたい事は解るよ。初対面の人は皆同じリアクションするからね」

笑いながら俺の質問に答えようとシャクナちゃんは説明を始めた。

「まずは、…なんでボクみたいな子供が政府機関なんていうお固い役所の局長をやってるかってことだよな」

うん、見た目小学生の局長なんてゴツコ遊びでしか見たことない。

「それはね、今全人類が直面しているある問題のせいなんだよ」

なんだ、それは？

まさか地球温暖化とか税金の無駄使い、なんてオチか？

「それはね、“幻想侵食現象”と呼ばれている」

うん、委員会とやらの名前にも書かれているからそんな感じじゃないかと思っていただけ。で、なにそれ？

「“幻想侵食現象”略して“幻食”というのは、人のイメージによる現実への侵略行為。なんて言ってもピンとこないよね」

うん、イメージによる現実への侵略行為、とか言われてよしわかっ

た、なんて言う奴がいたら今すぐ出てこい。

「人っていうのは多かれ少なかれイメージ、出来ない事を妄想して悦に入る事が事実上可能な唯一の生物だ。

それ自体に問題は無いんだけどね。じゃあ、妄想によって造られたイメージというのはどこに行くと思う？」

知らん。

そんな、脳内限定自由ワールドなんて始めから形が無いモノの行く先なんて忘れて消えるだけだろう。

その思考を読まれたのか、シャクナちゃんは、またクスツと笑い、説明を再開した。

「一土君、今形無い、存在しないモノなんて最初から無いなら虚無に消えるだけだ、と思ったでしょ。

でもね、最初から無いモノとして認識していたなら、“消える”なんて表現はしないよ」

ニタリ、と今まで見せていた笑みとは明らかに異質な表情に俺は、思わず生唾を無意識のうちに飲み込んだ。

「そう、目に見えないから最初から存在しない、と言いつつも君は無意識の内に妄想を“消える”と表現した。本来なら、それは最初から形無いモノなんだから消えはしない、そんなものはどこにも行かない、最初から存在しない、と言うべきだよ」

「他人の揚げ足取りみたいだな。悪いけど帰るわ」

そう、こりゃヤバイ。

意味不明な地下施設にいる女の子が電波的なこと言い始めたら、それはそれは、不気味なものだ。

「悪いけど、ここに来た時点であなたに選択権は無い。それに一応、ここは政府の秘密機関。そんなことを知っている民間人を野放しには出来ない」

進路を塞ぐようにディフェンスしてくる真琴ちゃん。そして、背後ではシャクナちゃんが真琴ちゃん言葉を補足する。

「まだ半分も説明は終わってないよ、一土君。付け足すようだけど今言った事は政府だけでなく、裁判所、警察といった国家を形成する組織のトップとその周辺人物しか知り得ない国家機密でね？」

つまり、今聞いた事を口外しようものなら如何様にも始末することが出来る、と副音声に含め、シャクナちゃんはテーブルに置かれていたジュースらしきもので唇を湿らせた。

「さて、今いきなり理解しろ、なんて無理な事は言わないよ。とりあえず、そうゆう問題があるんだ、っていう程度に思っていてくれるだけでいい」

「局長、少々悠長過ぎるのでは？」

今まで余り口を挟まなかった真琴ちゃんが少々苛立ったように、しかし、感情を表さず呟いた。

「かもね、でも。彼には現物を見て体験してもらった方が理解は早いと思うよ」

そこで俺に向き直り、さあ、説明を続けるよ、と目線でメッセージを送ってきた。

しかし、本当に何者だ、この娘？

「早い話が人の制御を離れた妄想という怪物が現実世界に干渉し、世界各地に怪事件として出現し始めているんだ」

「いきなり折り畳んで説明しはじめたな」

半ば呆れる。

さっきまでの長広舌は、一体なんだったのか？

「うん、疲れちゃったから、それに今理解させる必要が無くなっちゃったしね」

テキトーだなあ、この娘。

「それで、今世界を震撼させてる“幻想侵食現象”とやらが君をそこに座らせてるの理由なのか？」

「ああ、うん、“幻食”に対抗するためにはある特殊な資質が必要なんだ」

「真琴ちゃんも言ってたな、資質って？」

「極稀に“幻食”に対抗できる能力を持つ人間が存在する。その能

力の名称は、《エゴイステック・ブレイカー》！現実を食い破り権現する幻食種を虚無へ帰すことの出来る唯一の能力さ！！」

両手を上げてテンションを表現するシャクナちゃんだが、いまいち俺には理解しかねる、とゆうよりは、したくない。

「もう分かっているよね、君も《エゴイステック・ブレイカー》の一人なんだよ」

「…知らねえな。俺にはそんな特殊スキルなんてありやしねえよ」

「……ふーん、じゃあさ、今から約8年前、ある地方都市が原因不明の怪現象により数日間外部と一切の連絡が取れなくなったという事があったよね？君はその事件という大渦に巻き込まれて中心部にまで足を踏み入れた人間の一人、静狩 一士君とは同姓同名なのかな？」

彼女が何を言いたいのか、それだけで察しがついた。

クソッ、何だよ、それ。

何でいまさらあの事件の事なんて掘り返されなきゃなんねえんだよ。

「マスコミが世間に流した報道によると当時の大手製薬企業、アスクレピオスの研究部門が実験中に事故を起こし都市一つまるごと包み込む霧状のマイクロマシンが暴走し電波妨害や意識の混濁を招き外部からの侵入者を排除しようとした。となっているけど……」

やはり、この娘は知っているのか。あの事件の真相を。

「クソッ、あれは事故なんかじゃない。人の意思の元に、人という殻を破るためにアスクレピオスが行った大規模な実験だった。」

……君は、その中でも特別に成功した被検体、No.01。《殺刃鬼》、静狩一士、そうだね？」

そう、そう呼ばれたのはいつ以来だろう。

《殺刃鬼》

《円卓の切り札》

どちらも俺には過ぎたあだ名だ。

「それを知っているってことは、俺が当時何をしたのか、って事も知ってるんだな」

「もちろん。アスクレピオスの研究所、および本社の破壊。当時アスクレピオスを牛耳っていた、通称・円卓と呼ばれた十三幹部達の殺害に始まる連続失踪事件の犯人ってことだよな」

円卓の十三幹部。

その名を聞く日が来ないように細心の注意を払い、日常という生活を守っていたかったのに。

「断っておくけど君の過去の所業なんて興味ない。必要なのは、《殺刃鬼》の持つ力。《イマジン・キリング幻想殺戮》だ。」

「たしかに、あれなら、君の言う妄想の怪物すら殺せるかもな」

《イマジン・キリング幻想殺戮》

俺の持つ異能の力。

あらゆる存在、概念すらも、俺の振るう刃、“死”という、世界の

理が具現化した異形を纏い戦う人形。

「フフ、君をこちらに引き抜くには苦労したよ。花井さん、君の過去を下手に知ってるものだから過保護になつてたようだね？」

「なるほど、じゃあ、手取り早く説明してくれ。俺はここで何をすればいい？」

「クスツ、素直な子は好きだよ。…ボクの指示に従い、日本全土に出現する幻想侵食現象によって権現する幻想侵食生物の駆逐、およびそれを利用した二次事件の解決を頼みます。」

静狩 一士、君には、幻想侵食対策委員会実働部一課所属として働いてもらうよ」「

そう言つて一段落したみたいに本格的にジュースを飲み干しはじめた。

「いや、ちょっと待て、たしか俺の能力を研究員どもが《アナザー・エゴ》とか言つてたぞ」

「うん？ああ、特異能力番号01、《アナザー・エゴ》も《エゴイステイック・ブレイカー》の一つさ」

……つまり、だ。

《アナザー・エゴ》のような異能と呼べる“普通じゃない”力が世の中にいくつが存在し、その中でも幻想侵食現象に対応する能力を《エゴイステイック・ブレイカー》と分類されるのだろう。

「でさ、まだ不明なのがシャクナちゃんだよね？何で君がその歳で局長なんてやっているのか、全く説明されてないよね？」

あ、しまった、的な表情で固まるシャクナちゃん。
いいじゃない。
かなり可愛い。

そんな思考を傍受したのか傍らに控える真琴ちゃんがジトリ、とキツツイ視線を向けてくる。

「ロリコン?」

「オイ、コラ」

「なに?」

「初対面の人間に対してロリコン呼ばわりとは酷くない?」「あらやだ、わたし正直だから」

悪びれもしないでそんなことを言う女子高生。
やはり相性が悪いのか。

「あ、えっとね、パパがやりなさい、って言ったから」

「パパ?」

「うん、ホントのパパじゃないけど、ボクを引き取ってくれたの
ふうん、なんだか立て込んでいるのかな?
とりあえず他人のプライベートに土足で入り込むのはマナー違反で
ある。」

「でね！ボクの場合は、…これ！！」

とバンザイ。

えっ？

「局長の能力は空間展開系なの。特異能力番号05、アンチ・リアル・ワールド《非現実領域》
《名前は《玩具天獄》ホビー・ワールド》」

「まんまだな」

「この空間で局長に逆らわない方がいいわよ」

「なんで？かなり人畜無害チツクな能力じゃないか？」

手頃な位置に置いてあったクマのぬいぐるみを抱え上げた。
うん、かわいい。

「局長、何事も経験だと思っんですよ、わたし」

「うん、ボクも同じ事を考えていたよマコちゃん」

パチン。

指を弾いてシャクナちゃんが目を細めた。

その時、両手に抱えたクツション製のクマが勝手に暴れ出した、と言っよりも暴れ狂いだした。

ガスバキヤア！！

「！！！？」

左頬に強烈な打撃。

それに留まらず鳩尾と臍にも同量以上の質量が襲撃してきて思わずうずくまってしまう。

「ヴボボツ!!」

襲い掛かってきたのはクマだけでなく今まで全く動かなかった同類のぬいぐるみもワツサワツサと迫り来る。

そのうちの何体かはボタンの目の片方が取れかけてブラブラしてたり、腹や腕を破られ臍物色の綿が溢れ出ている。

なんだこのびみよくなホラー!!

「ちょ、まつ、待て、何だよこれ？」

「これが局長の実力。ここに居るぬいぐるみ的なクリーチャーは全部局長の想像によって創造された、とゆうよりこの空間全て局長の意のままにすることが出来る。言うなれば自分のイメージを現実に上書きすることが出来るのよ」

それって幻想侵食現象そのままじゃ？

なんてことを考えてる最中も殴る蹴るのリンチ的な制裁をくらいまくりボコられまくり。

いつまで続くんだ？綿製の足や腕だからそんなに痛くは、いや、痛い。

どうゆうことか表面は綿だが内部には相当硬くて質量がかなりある。

「ちょ、シャクナちゃん？こいつら止めて、か、かなり痛いんだけど！」

こうして、俺は、新しい組織での幻想侵食現象を食い止めるための
非日常的な日常の幕が上がった。

女教官様と酒臭い上司

「静狩さん、これからあなたには実地研修をしてもらいます」

と、わけのわからん組織の構成員となった日の翌日、俺は律儀にも皇居まで出勤し、地下にあり秘密基地めいた本部にたどり着いたわけだが。

「えっと、マコツちゃん？昨日は女子高生じゃなかった？」

そう、昨日はセーラー服姿で俺を番犬の如く監視していた彼女、今日は、古めかしいデザインであるが所々に精巧なシルバーアクセサリーを装着したディープグリーンの上下にロングブーツ、そしてベレー帽を装着なさってる。

一言で言えば女軍人。

付け加えるならばエリート士官。

黒髪の長髪は帽子の中に引っ詰めているのだろうか？

「趣味よ」

「……」

本人が言うなら文句は言うまい。

でもホントの年齢っていくつなんだ？

「それと、わたしの名前は真琴であるけど“マコツちゃん”ってなんですか」

「昨日シャクナちゃんが言ってたろ。“マコちゃん”って。俺なりのアレンジだよ」

「あれは局長のお遊びです。気に入った人間に対してはすぐに適当なあだ名を付けたがるんです」

それ、暗に自分がシャクナちゃんに気に入られてるって言うてるんだろうか？

「気に入らない？俺はいいと思うんだけどなあ」

「まあ、マコタン、とかマーチャンとか付けなかったただけまだマシなセンスではあると思いますが」

「じゃあ、オツケーな」

「好きにしてください。それより、話が全く進んでいないのですが」

あ、そっだそっだ、で、実地研修？つっても業務が業務だけに何させられるか分かったもんじゃないなあ。

「えーっと、まずはマニュアルなんかを渡したりはしないのかな？」

「この組織にマニュアルなんてありません。全て現場で叩き込みます」

すごいスパルタ。

さっきの女軍人とこに“鬼教官”って項目も入るんだらうな。

「本日未明、都内の沿岸、3キロ程の所で現界反応と思われる素粒

子が検出されました。といっても小規模なものですので特殊兵装の類は不必要。現界時刻は本日フタマルサンマル時。わたし達はその三時間前に現場に到着し、次元境界線上で接敵、討滅します」

喋り方が若干軍人テイストに。

成り切ってるんだな、手を触れないでおこう。

「何か質問は？」

「現界反応や現界時刻つてのは、幻想侵食現象の前段階だつてことは語感で分かるとして、次元境界線上、つて何？」

教官殿、表情が変化。

今までが普段の表情、クールフェイスだとするなら、道端にたまたま犬の糞を見てしまった的な顔。

しょうがないじゃないか、知らないんだから。

「次元境界線、というのもそのままの意味です。妄想どもが巣くうの向こう側の次元、私たちの住むこちら側の次元、と別れています。私たちにしても向こう側の住人にしても必ず通らなければならぬ空間。その境目をわたし達は、次元境界線と呼びます。あの世とこの世の境にある三途の川みたいなものです」

「へえ、じゃあ妄想どもがこっちに来れるように俺達も向こう側に行けるのか？」

マコツちゃん、ここでしばらく黙考。

だが、おそらくこれぐらい幻想侵食現象とやらについて調べているこの委員会が調査していないことは無いだろう。

彼女が黙っている理由は、結果について言っていないかどうか、迷っているのではないか？

「正直に言えば向こう側の探索は既に行われました。無人探査機を境界線上から操作してポータルをくぐり、向こう側の様子を探るというものでしたが、門を抜けた途端、あらゆる計測器が電波を受信出来ず、カメラも映像を写さなくなりました」

「成る程、目下、向こう側の状況は未知数、ってわけね」

「ええ、ついでにポータルというのは、…」

「門、ってことだろ。つまり、門を通り、境界線に入り向こう側の門から出て来るバケモンを倒す、と」

「概ねそれで間違いないです。説明しておきますが、幻想侵食現象対策というものは、世界各国で執り行われており、有事の際には協力体制となりますが、今回のような小規模の場合は現界場所のポータルに一番近い国の機関が担当します」

成る程、了解。

「あ、そのまえにマコツちゃんってどんな能力持ってるの？」

先日から気にはなっていた。

彼女の能力とは、どんな力なのか。

「…研究班の人達によると人間、とゆうか現実側の生物が持っている異能というものは、大別して、“自我展開系”“空間展開系”“使役調伏系”“自己強化系”の基本四種。私は使役調伏系の能力、

とだけ言っておきます。あなたは、分類的に言って自我展開系にあたりますが厳密に言えば、自我展開系と自己強化系の中間に当たると思えます」

「たしかに、昔アスクレピオスの研究員どもも別人格のマテリアライズ化がどうこう言ってたっけな」

「無駄話は、ここまでにして移動しましょう。質問は車内でも」

無駄話って…。バツサリと切り捨てられた感じがいなめない。

とはいえ、人類が異能を現実のものと認識しており、かつ、その研究とやらをくそ真面目に行っているとは意外だ。

「科学者も自分の目で見たものを否定することはできない、ってことかな」

「何か言いましたか？」

「いや、なぐんにも」

ジイ、っと見つめ、いや、睨みつけて視線をガラス窓へと移動させたマコツちゃんは端にある指紋照合機のようなものに手を当て、さらに上にある網膜照合装置に自分の目を捉えさせる。

すると、ガラス窓が空いて何やら物々しい物品がズラリと吊されていた。チャカ、ガン、ピストル、いろいろな呼び名はあるが、いわゆる拳銃と呼ばれる類の違法火器が新品の弾倉と共にしまい込まれている。

ブツ自体は零課時代から携行と所持を認められていたため珍しくも

ないが、問題なのは装填されるべき弾だ。

流線型の砲弾型とゆうのは変わりないのだが、材質はどう見ても透き通るようなクリスタル。

それでは発砲した時に砕けてしまう。

「特殊兵装とは別に通常兵装と呼ばれる武装です。発砲しても砕けません、特殊な水晶を加工して造られた弾丸で、幻想種に命中すればある程度のダメージを与える事ができます」

「撃つのか、やっぱり」

「それ以外でどう使いますか。軍隊ならガン・カタ等を仕込むんでしょうが、撃鉄を起こして引き金を引く、これ以上拳銃に合った使用方法がありますか」

正論。反論を述べる隙も無い。

「あまり時間もありません。2、3個通常弾装を使用して拳銃のクセを掴んでおいてください」

拳銃を持った事はある。所持して現場に向かった事もある。だが、生きている存在に向けて引き金を引いた事はこれまで一度も経験したことがない。

だが、俺が身を置くこの委員会では、拳銃を撃つことが当たり前の世界で仕事をこなしていく必要がある。

「拳銃が通常兵装、ってことは特殊兵装ってどんなの？ロケットランチャーか？」

「それも通常兵装に含まれます。もちろん、ロケット弾も普通の火薬を使いはいませんが」

涼しい顔で、たまに凄い事言わないか、この子？ともあれ、横にある射撃訓練所じみたスペースがあるわけだし、さっそく手に持ったW&S社製オートマチックの拳銃に弾を入れる。

と、その時向こう側で射撃訓練をしていた髭面のおやじと目が合った。

ニカツ、つと男臭い笑みを俺に向けてきやがった。

「権堂さんよ。実働一課の現場指揮官。私たちの直属の上司でもあるわ」

そこまで説明したマコツちゃんは、早く行けと無言のプレッシャーをかけてきた。

「直属の上司、ねえ」

「こつ言っでは何だけどころかなり豪快な人よ。面倒臭い事が嫌いでもあるけど」

それ、指揮官としてはどうなんだよ。

そんな言葉を飲み込み自動ドアを跨ぎ、つて。

「酒クセエ!!」

思わず叫んでしまうほどのアルコール臭。

「ん？おお、悪いなアンちゃん。酒は嫌いか？」

酒瓶片手に声を掛けてきたのは先程紹介された権堂指揮官。
今、勤務時間だよな？

それ以前に第一声が“酒は嫌いか”ってもっと他に聞く事あるだろ！

「はじめまして、昨日付けで実働一課に配属された静狩…」

「一士、だろ？花井の野郎、ようやくアンちゃんをこっちに寄越したらしいなあ」ム、人の台詞を取って、しかもなんだ？人を物みたいに言いやがって。

「よろしくお願いします。花井課長とはお知り合いで？」

「野郎がこつちの現役だった頃から知り合いだ。もちろんアンちゃんのこともある程度は知ってる。それとよ、固つ苦しい言葉は使わねえでくれねえか。なんか背中がむず痒いわ。ハッハッハ」

野太い声に顔の三分の一程が髭に隠れたおやじ臭い顔が熱つ苦しい事この上ない。

が、事ここに至りようやくまともな人間に出会えた気がする。

「はあ、そんじゃお言葉に甘えてそうさせてもらいます」

「おう、ああ、そうだ。オレは権堂ゴンドウ 一馬カスマノスケ乃介ノスケつてんだ。長つたらしいから権堂が一馬でいいわ。けど、一応、“さん”は付けるよ？
後ろのやかましいのが出て来るからよ」

後ろの控室で腕組みしてるマコツちゃんを見て権堂さんは悪戯小僧みたいに笑った。

超能力オヤジと殺刃鬼、ときどきマッド

「今日から研修兼実習だつてなあ。ま、あまり気張らず…、緊張でいっぱいいっぱい、ってわけじゃなさそうだけだな」

またもや一人で笑う上司。

新人は話しを合わせるべきなのか？

「まあ、ぼちぼち、程々に頑張つてきます」

「ハツハツハ、こりゃ花井の言った通りだ！アンちゃん、本気で仕事したことないんじゃないか？」

「え？」

いきなりの不意打ち。

突然の質問に戸惑う俺の脳。

「花井が言ってたぜ。アンちゃんは零課の仕事を並に熟しちやいたが本気になってはいなかった、つてなあ」

「いえ、そんなことは」

否定しつつも、否定仕切れない。

零課の仕事といえはオカルト関係、特に頭が火星辺りまでブツ飛んだ連中がはしゃいで世間に迷惑かけないように“保護”と“監視”することだ。

無論、そんな連中ばかりだから多少の荒事になることもあった。

けど、たしかに、零課の仕事に比べれば高校時代にアスケレピオスと対立していた時に掛けた情熱は格段に上だった。無意識の内に退屈していたのだろうか？
そうかもしれない。

「花井は悩んでたぜ？アンちゃん、素質は十分、才能だつてとつくに花開いている。なのにこのままぬるま湯に浸かってたらせっかくの逸材が消えちまう、ってな」

自分をそんな風に評価してくれている人がいる。そう考えるとうれしい気もするが、

「結局、それって俺は殺しの才能しかない、ってことですか」

「それが悪いことだと思っているのか？」

「……思っちゃいけないんですか」

このオッサンに対する反発心、いや、自己否定も含有された黒い色に心が染まる。

「人殺ししか能の無い自分なんて最悪、としか言いようがないだろ」

つい地の言葉が口をついて出た。

少し本音を当てられたらすぐに動揺するのは悪い癖だ。

「どうして人殺しがいけない？」

「はっ！？」

「だから、どおして人殺しがいけねえ、なんてアンちゃんが言えるんだ？」

そう言った権堂さんは笑い顔以外の表情、睨むだけで気の小さな人間ならそれだけで気絶してしまいそうな凄みのある顔で俺を見た。

「これ、見てみる」

ひよい、と持ち上げられた右の二の腕には根性焼きにしか見えない火傷痕が30は数えられる。

「何だと思う？」

「知らねえよ、若気の至りではしゃいで入れた根性焼きにしか見えねえな」

それを聞いた権堂さんは、俺を見下したような目を俺に向ける。

どんな意味があるか？

そんなの知るかよ。本心からそう思う。

「こいつはな、」

「興味ねえな」

権堂が言葉を話す前に銃口を持つ右手が振り上がる。照準なんて確認するまでもなく顔面狙い。

ガギャン！！！！

銃声にしてはイビツ。着弾したわりには甲高い。

硝煙の向こうには先程と変わらない権堂。

決定的に違うのは、彼の周囲には白い靄のような不定形な気体が渦巻いている。

「機先を制して警告無しの発砲たあ、いいい殺し屋になるぜ、ア
ンちゃん」

……ウルサイ、オレヲ、ソノ目デ見ルナ。

心の、否、脳髓の奥底、意識という光りが届かない、人間のブラックボックスから響く懐かしい、殺したいくらい聞きたかった、また死んでも聞きたくなかったもう一人の俺。

俺が否定し続けたもう一人の俺という人間が、無いはずの身体に闇色の衣を纏い身を起こす。

視界には漆黒の身体の背中。

俺の眼前に仁王立ちするように現れた。

「…よう、二度と会いたくなかったぜ、クソ野郎」

俺の身体が漆黒の身体へと溶け込んでいく。

有り得ない程の一体感が俺の身体を包み込み、またどこからが俺の身体でどこからが闇なのか、認識が曖昧となる。「ほう、こいつあ、たいしたもんだ」

白い靄を展開しながら権堂は素直に感心した。

対峙する新入りが身に纏う、全ての色を吸い込むような艶消しの黒い塊。

資料に記されていた通り、

《アナザー・エゴ》

とは、別人格に仮想実体（自分が想像した通り幻想侵食により実体化させた身体）を持たせ自身と同化し、想像した別人格の原型となった概念を理不尽なまでに行使することを可能とする異能。

目の前の新入りに纏わり付く黒い塊は、初め不定形で揺らめき、形が定かではなかったが時間を追うにつれ確固とした実体を得た。

「……………」

それは、頭部から足の爪先まで覆う黒一色の全身鎧。だが、そんなことより権堂に懐かしい匂いを運んで来た強烈な概念。

そう、かつて自分と仲間達に襲い掛かり足の遅い者、鈍臭いマヌケ、単に運の無い奴等を端々から貪り食っていった、全人類が最も忌避する不吉な概念、“死”だ。

「権堂隊長!!」

ドアの向こうから真琴がこちらを心配するかのように声を上げている。

心配するなよ、だいたい、このちよろい芝居は、新入りが使えるかどうかのテストだろうが。

こっちは万全を期して迎え撃つ、それだけだ。

と権堂は思うが内心では、これは、ただの実力テストでは済みそうにないということも感じていた。

「余裕はなさそうだな。いやまいったなあ」

「ソノワリ二八、随分余裕ダナ」

機械の合成音声の様に抑揚の無い声が黒い鎧から発せられた。

「おいおい、いきなりの声変わりだな。成長期？」

「カツ!!」

黒い鎧は一瞬で3メートル程の距離を詰め右拳に全体重を乗せ正拳突きを放つ。

それは、まるで至近距離から放たれる砲弾そのものをイメージさせ無意識の内に全力の回避を権堂に強制させた。

まずは詰められた距離の二倍離れる。

そして、冷静に相手の行動を予測する。

平行して己の異能をどのように使用すれば効果的か理論的に推測する。

権堂の能力は、異能番号NO4、

フェノムコントロール

《現象操作》

世界のあらゆる現象を限定的に展開し、それを用いて対象を攻撃し、また自身を守る防壁ともなる。

権堂が操作できる現象は靄という不定形の光と水蒸気の反射現象であるため、もっぱら副産物である屈折現象による回避と防御の為の能力である。

名前は、

フレンドレイ・ミスト

《親愛なる靄》

彼がこの能力に目覚めたのは5年前。彼が傭兵として中東の紛争地域で敵も味方も見境無く殺し、殺されまくった血みどろの最前線で

銃弾を受け倒れていた時だった。

目の前までに接近してきた敵の兵士が急に立ち込めてきた霧に混乱し、慌てふためき撤退していったのだった。

中東という乾燥地帯で霧という水蒸気が広まり、視界を塞ぐレベルまで高密度に展開されることは有り得ないことだ。

彼は、この能力を今まで死んでいった仲間達が自分を守ってくれたのだと信じた。

それだけでなく彼の操る霧はクッションのような緩衝剤としても弾丸の威力を減衰させることができるようで一度戦域に展開させれば敵兵の放つ銃弾は全て無力と化した。

しばらくして、その地域で“白煙の操者”と呼ばれる様になった頃、一通の国際郵便が届いた。

それが幻想侵食対策委員会からのスカウトだった。

今はその霧を使い眼前で再び攻撃しようとする体勢を整える黒い鎧の視界を塞ぐ様に密集させる。

いつか敵兵士にそうしたように、まずは、五感の一つを奪い動きを制限する。

「カツ、カカカカア！！！！」

視界を白一色に塗り潰されたはずの黒い異形が高らかに嘲笑う。

こんなモノ、自分には全く無意味だと言わんばかりに。

それこそ、壁や仕切りが震える程の異常な音域で。

「ナルホド、鉄鋼弾テイドノ概念デハ死ナナイれべるナワケカ」

“死”がそうだった。

「教エトイテヤルガ、俺八、貴様ガいめーじシタ死ヲ纏ッテ攻撃ヲ仕掛ケル。ワカルカ？貴様ガコレマデ経験シタ死ガ形ヲ持ッテ襲イ掛カルワケダ」

つまり、今までの人生でイメージした死という概念がフィードバックしてくるわけだ。
人間にとつての最大のストレス。
個体であれば自分の死。
種族としてならば種の絶滅。

それらが常に襲い掛かるイメージどダブリながら戦闘を繰り広げる。正常な神経の持ち主には、三合と持たないだろう。

拳を打ち合わせる度に、避ける度に、追い打ちをかける、もしくは、かけられるたびに自分が死ぬビジョンを直接脳みそに叩き込まれるなんて発狂してしまうほどの精神攻撃だ。

「サア、貴様ハ、ドコマデ踊レル？」

視界を塞がれた鎧の頭部装甲が歪み、嘲笑う表情を確かに作った。

「ふ、ふふふ、ふひひははは！！」

死が嗤うのに呼応するかのように権堂は、笑った。

「……何ガオカシイ、人間」

「ひはははははは！いや、わりいわりい、昔かい潜ってきた、なつつかしい気配でなあ。ひははは」

止まらない笑い。

それはそうだろう。

一昔前まで血へドを吐き、全身の痛覚が悲鳴を上げて動けなかった、仲間助けられ、また自らも敵に叩き付けた弾丸弾丸弾丸。

全ての色を失っていたモノクロの、惨めな死が鮮明なグラデーショ
ンと音を伴い、思い出したくもない過去が今に追いついて来た。

これほどの不気味な体験、吐き気をもよおす感情は、経験したこと
がない。

もう実力テストなんて関係無い。

俺の全てを賭けて、今度もお前の鎌を避けてやるよ。

「さて、一応聞いとくが、お前、アンちゃんか？」

「アンナ腑抜ト一緒ニスルナ、ろーとる」

「ほう、てこたあ、アンちゃんは寝てるのか？」

「アア、無理矢理寝カシ付ツケテヤッタヨ」

満足そうに口を歪める異形。だがその唇がわずかにわななっている。

「そうかい、つまり、殺戮本能剥き出しだな。オーケイ、後はアン
ちゃんをたたき起こせばいいわけだ」

「デキレバナア！！ロオオオトオオルツツ！！」

叫び、瞬間移動と見紛う速域で権堂の頭上に降り立ち、膝のクツシ
ヨンと重力を利用し直滑降の拳を突き付けた。

（焼夷弾かつ）

脳裏に焼き付いたヴィジョン。それは、権堂を持ってしても遠くからしか眺めたことのない気化燃料を満載した燃え続ける事を目的とした爆弾。

「よっ、とお」

天井に手の平を向けそこに靄が集中するイメージを脳内でトレースタイムラグ無しで部屋中に充滿した靄が一気に集まる。

すると、落下していた《殺刃鬼》を包み込み、白い繭ながらの外観に変え、宙に停滞させた。

「いやあ、ロートルもロートルで頑張る時は頑張るさ。明日、いや、明後日辺りに来る筋肉痛とか恐れずにねえ」

声に応えようと白い繭がモニュモニュとうごめく。

「あ、ついでにその靄にゃあ、防音効果もあるからな、どれだけ大声出しても外に漏れることあ無い」

自慢げに自らの能力を説明する権堂だったが、向こう側も同様にこちら側の音を聞き取れない、という事実を失念している。

「さて、案外楽に捕る事は出来たが、どうやってアンちゃんを起こそうかねえ……」

「権堂隊長！ご無事ですか？」

すると、後方から真琴が駆け寄って来た。

どうにも心配かけたのは事実だが、

「真琴、はええとこ下がれ。野郎、まだやる気だ」

「えっ」

地面に転がる純白の繭から音も無く漆黒の腕が突き出たのは、権堂の台詞が終わるかどうか、というタイミング。無論、権堂の体が死角となり真琴は、反応するのに数瞬遅れた。

「オ、オオオオアアアアアア！！」

純白の束縛を音も無く引き裂きながら《殺刃鬼》は、怒りに震える雄叫びを上げた。

「アアアアアアアア……！！」

今や《殺刃鬼》の動きを封じる靄は、反対側が透けるほど薄げだ。

「おいおい、俺の靄を力づくで破ったってか」

これには、権堂の顔から余裕が消えた。何せ靄とはいえ、彼の精神的強度がこの靄の耐久力なのだ。

言うなれば、靄が密集した白い繭は物理的な力で突破されようはずがない。しかし、《殺刃鬼》は自身の腕で靄を破った。

「どうゆう理屈だ？」

『……考えられるとすれば、《殺刃鬼》の身体には精神破壊機能ともゆつべき能力が内蔵されているのでしょつか』

部屋の四隅に設置されたマイクから理知的な男性の声が流れってきた。

「おう、マッド。今まで取れたデータはどんな感じだ？」

マッド、と呼ばれた声の主は、聞き取れるほどのため息をつく。

『データも何も、異常な精神波形がサーモグラフィに現れっぱなし。個性がありすぎて他の精神構成、表皮物質、固有能力も計測できないよ、アル中年』

「何の役にもたたねえマッドサイエンティストだな、おい。人類の為に脳を爆破しろ」

『馬鹿な、僕の頭脳こそ、人類栄華繁栄のために欠かせない鍵だ。今すぐ人間国宝に認定されてもおかしくないだろう。そんなこともわからないとは、君はどうやら相当、酩酊しているようだ。薬を処方してやろう。おやおや、ちょうど青酸カリウムが余っているよ、これを出そう、そうしよう』

毒舌を吐き合い続ける二人。

そんな中ユラリと立ち上がった《殺刃鬼》がマイクの一つにコンクリート片をぶつけ破壊した。

「フザケテンノカ、テメエラアア！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8892j/>

エゴイスティック・シンドローム

2010年10月10日05時14分発行